

昭和五年十月（十六日より三十日まで）

埴輪特別展覽會目錄

帝室博物館

## 第一室

群馬縣佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳發掘品の一切を陳列してある。本古墳は昨昭和四年十二月、本館と群馬縣との合同で發掘調査したもの、前方後圓墳で、全表面葺石を以て覆はれ、埴輪圓筒列を繞し、後圓部の頂上にこゝに蒐めてある埴輪家の類を安いてあつた。これらの家が、どんな風に排列してあつたか、古墳表面が犁鋤の厄を受け、埴輪類が破片に碎け散佚してゐるので、十分に明かにし難いが、恐らく相集つて一の屋敷をあらはしてゐたものと想はれる。

NB1053.2

.T44

1930



## 第一 函

### 一 堅魚木を上げた舍屋〔圖版第二〕

切妻平入、きりづまひらいり三間二面の家をあらはしたものであ

らう。窓は四つも切られてゐるが、後世の民家の様に蔀障子か又は紙障子をたて得る様に開けられてゐない。堅魚木かつぎを棟に上げるは天皇の舍屋と、『雄略記』にあるが、地方の豪族も時には之を犯したのであらう。併しともかくこの堅魚木の棟に上つてゐることや、三間二面の家にいくつもの窓を開けてゐることなどからみて、これが屋敷中での主をなすもの、即ち主人の舍屋、後世いふ寢殿であつたらうと想ふ。

### 二 網代をのせた舍屋〔圖版第二〕

切妻平入、きりづまひらいり平面は矩形をなすが、柱を以て數へれ

ば二間二面となる。前者に比べると、堅魚木も上げず、窓も一つだけであり、大きさから見ても稍々小作りで二間二面をなすに過ぎないから、此を一門の人達か又は召使などの舍屋と考へてもよからう。これと全く同型式と思はれる家がもう一軒あるが、破片があまりに少いので復原をしてない。併し此の事實、即ち寢殿に次ぐ舍屋が二軒



七未詳埴輪 屋蓋のない、單なる「圍かこひ」である。支那明器なら便所といふと

ころであるが、何か家關係のものかと思ふだけで、性質は明らかでない。入口の上の裝飾を注意されたい。

### 第三 函

#### 八机形埴輪

〔圖版第三〕

從來の發見例なきもの、しかも類形のものもない。

供物臺かとも想ふが、これは一の臆測に過ぎぬ。埴輪家と共に、後圓部の頂上附近におかれてあつたらしい。埴輪としては、珍しく精緻の作である。

#### 九笠形埴輪

此の種のもので最も著しいのは、大和國日葉ひは酸すひめ媛のみささぎ陵から發見

したもので、神輿みこしの屋根に見る蕨手や魚鱗などが附加され、徑二米近くの大形のものである。これの復原圖を作られた前諸陵頭山口博士は、これを御葬列器具の衣笠きぬがさを模したものと斷ぜられた。衣笠（絹蓋）か又は菅蓋であるかは明かでないが、この種のものが、次にいふ翳かざしの類と共に貴人の行列等に用ゐられたことは支那にあり、我が國に

あり、且つこれが同一型式と思はれることが、更に先に述べた之を一門の人達又は召使などの舍屋とする推定を、より確かにするであらう。

三 納屋 小さいので、これを納屋なやの類と推定した。

## 第二一 函

四 寄棟造の倉庫 床下が高いことから、これを倉庫と見た。屋根が寄棟よせむねになつてゐるのも珍しい。窓のないのは、これが倉庫であるからであらう。戸をとざした入口も面白い。

五 校倉式の倉庫 切妻きりづま。床下が高く、前者と似た様式に作られてゐるが、羽目はめに横材よこざを使つてあるので、校倉あせくらを模したものと想像してもよからう。

六 校倉式の倉庫 前者と似たものであるが、横材の幅が少し廣い。本古墳からはなほ家の破片が發掘されてゐるが、完全な形に復原することが不可能であるから、ここに陳列してゐない。恐らく三四軒分のものと思ふ。



られぬだらうか。

三 鶏 これは前方部から發見された。頭部だけしか残つてゐないが、作はよい。

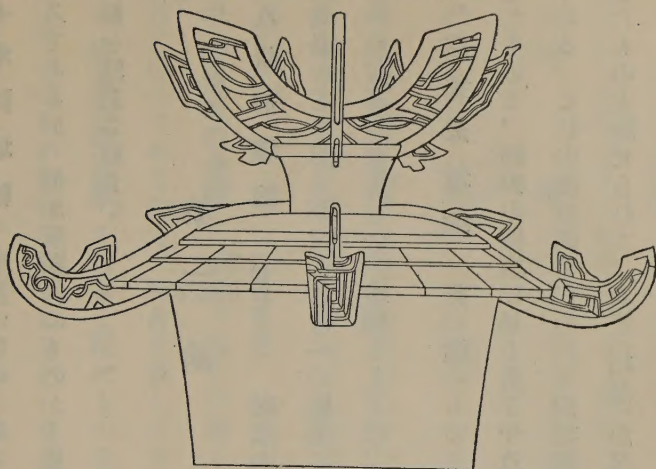
もう一つこれと等しい様式の鶏の頭部が古く發掘されてゐる。『神代紀』の天岩戸の條に、思兼神が深く謀り深く慮り、遂に常世の長鳴鳥を聚めて、互に長鳴せしめたところ、埴輪の鶏もこれを似た意義のものとして樹てられたものではあるまいか。

三 翳形埴輪破片 これは直接本茶臼山古墳から發掘したものではないが、近接し

た小圓墳群集地で表面採集したものである。この茶臼山古墳發見の埴輪類は、惣じて其の作が極めて優れ、他の古墳出土のものとは著しい差違を示してゐる。この翳形さしげなのも、作から見れば同一種類に含め得るし、かつ本古墳を訪ふて採集した考古家が、隣接してゐる圓墳群を實査中、そこに遺失したものと見てもよい。その上、其の小圓墳群には埴輪のおかれてあつたとも思はれないので、假に茶臼山古墳發見のものとした。翳さしは柄の長い大きな團扇で、行列に於て貴人にかざすものであるが、恐らくこれは其の翳を模したであらう。さすれば、笠形埴輪と共に、葬列に使つたものを模したこと



日葉酸媛陵發見笠形埴輪



於ても、『古語拾遺』に、天照大神天岩戸がくれの時、矛・盾と共に蓋を調製せられたことを記してゐるし、伊勢大神宮御遷宮の料にもそれがあり、大嘗祭のとき、天皇渡御に御菅蓋をさしかけ奉ることも行はれてゐる。本古埴には、少くも二體の遺骸が葬られてゐると想はれるところに、この笠形のものが多少様式を異にして二個發見された事は面白い。

## 二 高坏形埴輪

脚に三角形の透すかし

あるところまで、須惠器の高坏たかつきと似てゐる。供物臺(机)かとした埴輪とも、に、葬儀に使つた道具を模したものとは考へ

## 第二室

土偶を陳列してある。土偶には男子と女子とがあり、男子には武裝と平常の服裝とを表したものとがある。これらがどんな意味で墳墓に樹てられてあつたかは、學者によつて多少考を異にしてゐる。しかし樂を奏する一群、禪をかけ、坏や瓶を捧げて給仕する采女の一群などが發見されるところを見ると、埴輪の土偶にも支那明器の性質に似たものがあり、随つて土偶の表す服飾などにも、多少從來の見方を改める必要があらう。

になる。

## 第四 函

此の茶臼山古墳の遺骸を藏めてあつた部分は、木炭槨ともいふべき構造で、そこに鏡・刀・劔身・玉・石製品等が副葬されてあつた。今その副葬の大体をこゝに示した。

## 第一 函

### 四 帶を結び垂れた男子

〔圖版第四〕

茨城縣猿島郡新郷村大字中田町發掘

上古時代の男子は、髪を左右に分け、兩耳の邊に於いて各々此を結束した。此を美<sup>み</sup>豆良<sup>づら</sup>といふ。美豆良に種々の様式がある。此の土偶の結髪は其の一種で、その末端が胸の上部に達してゐる。頸玉<sup>くびだま</sup>をまき、窄袖<sup>つくそで</sup>で丈<sup>かけ</sup>の短い衣を着け、帶を正面右寄りに結んでその餘を垂れてゐる。古く帶を「たらし」と訓んだのは、これをいふたのであらう腰の左に横たへ、左手に把<sup>と</sup>つてゐるのは大刀<sup>たち</sup>を表したものである。

### 五 幞頭を被つた男子

埼玉縣北足立郡川田谷村字八幡原發掘

紙囊の様な被物をつけ、これを緒で結びしめてある。後世の束帶の冠の起源をなす幞頭<sup>ぼくたう</sup>は、これとは形の異なるものであるが、性質に共通なものがあり、「幞頭」がこんな形のものから進んだと想ふてもよいと思うので、假にこの土偶の被物に「幞頭」と名を付けておいた。美豆良は半ば以上缺失してゐるが、其の末端が肩に達した痕を微かに





紐で肩につるした太鼓を、撥はちでうつてゐる。

### 三 壺（缶か）を叩く男子

群馬縣佐波郡剛志村大字下武士發掘

紐で肩につるした器物は壺らしいものであるが、これを右手でうつ姿態といひ、前者及びこゝには陳列してゐないが、琴をひく男子などが同一古墳から併せ發掘されてゐるに見て、相集つて樂隊バンドをなしたものであり、墓前の奏樂をあらはしたと考へてよからう。

### 三 跪坐の男子

茨城縣行方郡秋津村大字青柳發掘、東京帝國大學人類學教室藏

普通に見ない姿態で、四つ這になつて居る。彩つた鋸齒文繫ぎを裝飾とした被物をつけ、頸玉をかけてゐる。

### 三 革甲着用男子

群馬縣群馬郡岩鼻火藥製造所構内發掘

頭髮を左右に分けて美豆良みづらに結び、頸玉を施し、甲を著用し、籠手を懸け、左手に大刀を握つてゐる様を見るべきである。其の甲よろひの縁ふちに糸の綴目の如きものゝあるを見れば、これは金屬製の小札こざねから成つた甲ではなく、革甲かはよろひなどの類を模したものであら

残してゐる。腰に帶を締め、正面に結んでその餘を垂れてゐる。左腰に佩いた大刀は柄部を缺失してゐる。顔に彩色を残してゐる。

## 六 白玉の頸玉を纏いた男子

茨城縣猿島郡森戸村大字百戸發掘

かぶりもの被物は上部が丸くなつて帽の形をなしてゐる。其の下部の剝落してゐる部分は、帽の縁(つば)であつたらう。美豆良みづらの下に耳環がある。頸玉は正面を細かに表し、特に結目を示し、背後は殊更簡略にした。玉全部に白色を塗つてゐるのは、「白玉しらたまの御統みすなる」を表したのかも知れない。帶の下部左腰に二本の附著物あるのは、刀子かたな二口をあらはしたのであらう。

## 七、八 農夫の一群

群馬縣佐波郡殖蓮村字權現山發掘

一つは上げ美豆良をつけ、耳環を下げ、頸玉をまとひ、腰に刀子かたなをさげ、鍬を肩にして居り、他の一人は鎌を手にしてゐる。落陽をあび、一日の耕しを了へて家路を急ぐ農夫の一群を表したと見てもよからう。

## 九 太鼓をうつ男子

〔圖版第五〕

群馬縣佐波郡剛志村大字下武士發掘

被物かぶりものは普通の冑と異なり、革製のものであらうと思はれる。原始的な繪畫文を刻してゐる板の如きものゝ正面にあるのは、楯を樹てた様を模したものであらう。本土偶は全く本州各地から發見のものと趣を異にしてゐるし、且つこれが我が國最南の發見土偶であることを注意されたい。

## 第 二 函

### 三 柄に手をかけてゐる武裝男子

〔圖版第七〕

群馬縣群馬郡箕輪町大字上芝發掘

衝角付冑しよつかくつきかぶとを被り、挂甲かけよろひを着用した男子が、右手をのべて大刀たちの柄つかをつかみ、將にこれを抜かうとしてゐる動的の姿を表してゐるのは珍しい。

衝角付冑しよつかくつきの下に垂れてゐるのは鞆しころであらう。前に著しく突き出で、裾に太い縁ふちをつけて頭の大きい鍔金物を廻し打つてゐる。冑の兩側に板様のものを取付けてあるが、何の用をなすものかは明かでない。冑下に於て、頸の兩側に長く出てゐるは美豆良みづらである。兩肩の上を覆ふてゐるのは肩鎧であらう。挂甲かけよろひの上に帶を結び垂れ、かつ前に



う。革甲の如き有機質を材料としたものは、土中に於て腐朽し去るので、實物の遺物にこれを求めることが出来ないとするれば、これは貴重な資料といふべきである。

### 三 挂甲着用男子

〔圖版第六〕

茨城縣行方郡秋津村大字青柳發掘

しよつ かくつきかぶと  
衝角付冑の前兩側面に長方形の板様のものがついてゐる。陳列番號第二十六の群馬縣世良田發掘土偶の頬のところに垂れてゐるものは、これと同一種類と見るべく、革製の垂れで必要に應じて上げたり又は垂らしたと見るべきであらう。甲は小札を威したところの挂甲の類と思はれる。腰に大刀を佩き、禪に脚結を施してゐるは他の武裝土偶と同じである。

### 二 弓を執る武裝男子

栃木縣安蘇郡大伏町大字大伏發掘

しころ  
鞬をつけた衝角付冑を被り、挂甲を著け、大刀を佩き、腕に籠手を懸け、左手に弓を執り、禪に足結を施し、足に履をはく。

頸玉をかけ、耳豆良に結んだ様も見える。

### 二 楯を樹てゐる武裝男子

熊本縣八代郡野津村發掘

をはいてゐるのは、武裝男子に普通見るところである。

### 二元頭形の冑を被る男子

〔圖版第八〕

埼玉縣兒玉郡十條村發掘

大きいことではこれの右に出るものはあるまい。頭の形にならつた、即ち頭形<sup>プナリ</sup>の冑を被り、美豆良をたれ、盤領<sup>あけくび</sup>の甲衣<sup>よろひきぬ</sup>を着、籠手<sup>こて</sup>をつけ、太い禪<sup>はかま</sup>を足結<sup>あさぐつ</sup>ひし、履<sup>はき</sup>をはいてゐる。丸ぐけの紐で帶をしてゐるのも珍とすべく（後世の甲は多く丸ぐけの紐を用ふ）、軛<sup>とこ</sup>を垂れ、刀子を背負うた大刀を佩いてゐる。

### 三 楯を前にする男子

茨城縣筑波郡小野川村大字下横場發掘

圓筒に目鼻をつけたともいふべき様式である。額上のは、鉢卷の結び目の様にも見えるが、恐らく頭形<sup>プナリ</sup>の冑に見る眉庇<sup>まびさし</sup>代りのものであらうか。耳は簡單に小孔を以て表し、その下に大きい耳環を下げてゐる。前にかく板様のものは楯であらう。上下に縁をあき、鋸齒文の裝飾がある。

### 三二 合刀子を下げてゐる男子

茨城縣筑波郡小野川村大字下横場發掘

これも圓筒に目鼻のついた仲間である。棒槁の様に顔から胴へと朱の彩りのあるの

皮袋を下<sup>げ</sup>、腕<sup>こて</sup>に籠手<sup>こて</sup>をつ<sup>け</sup>、あまり太くない褌<sup>あゆひ</sup>に足結<sup>あゆひ</sup>をし、履<sup>くつ</sup>をはいてゐる。

### 三 甲衣を右衽に著けた男子

群馬縣新田郡世良田村大字世良田發掘、和田千吉氏藏

衝角付冑には、殆んど垂直に鞆<sup>しころ</sup>が垂れてゐる。甲<sup>よろひ</sup>は小札<sup>こざね</sup>を衣<sup>きぬ</sup>に綴<sup>み</sup>ぎ付けた様式のもので、綿甲冑など呼ばれたものはこんなものであつたらうか。これを右衽<sup>みぎあはせ</sup>に着けてゐるのは面白い。我が上古時代人には左衽が常であつたが、奈良時代に入つて唐制の模倣が盛んになつてから、漸次右衽に風を改めて行つたのである。

左右の腕に籠手<sup>こて</sup>を懸<sup>か</sup>け、特に左の籠手の上に鞆<sup>とち</sup>をつけてゐる、左手に垂直に持つたのは弓で、弦をさへ模したのを見るべきである。左腰<sup>た</sup>に大刀<sup>たち</sup>を佩<sup>は</sup>き、右腰から後へかけて鞆<sup>ゆき</sup>を著けてゐる。褌<sup>はかま</sup>に脚結<sup>あゆひ</sup>を施<sup>お</sup>し、足に履<sup>くつ</sup>を穿<sup>は</sup>いてゐる。

### 二 天冠を被つた武裝男子

群馬縣佐波郡三鄉村波志江發掘、柴田常恵氏藏

後世舞樂でいふ天冠の系統の被物をつけてゐる。美豆良は左右ともに缺失してゐるが、根元に其の痕跡を残してゐる。頸玉をかけ、籠手をつ<sup>け</sup>、二ヶ所に結紐のある衣<sup>きぬ</sup>を着、その上に結びたれた帶には、大刀と鞆とをさげてゐる。太い褌<sup>はかま</sup>に足結<sup>あゆひ</sup>をし、履

### 三 瓶を手にする女子

群馬縣佐波郡赤堀村大字下觸發掘

島田式に結髪し、頸玉くびだまを纏きぬひ、衣きぬ（形には表れてゐないが）に帶を結び垂れ、襦を掛け、瓶の如きものを右手にしてゐる。胸部に相並んだ一對の小突起は乳房を表せるものであらう。

### 三 坏を捧げる女子

茨城縣行方郡秋津村大字青柳發掘、東京帝國大學人類學教室藏

襦をかけ、坏を捧げてゐる。食膳に侍る女を表したものと見てよい。

### 三 袈裟様のものをかけた女子

群馬縣佐波郡剛志村大字下武士發掘

頭部を缺失してゐるが、乳房の盛り上つてゐるに見て、これを女子と推定した。襦をかけ、長い横巾されを片肩はすしにかけてゐるところは、臺灣・フィリッピンなどの土人の間に行はれてゐる原始的服飾を聯想させられる。この服飾をした土偶のすべては女子であり、襦をかけて居り、かつずつと進んだ服飾のものと伴うて發見されて居り、其の上に多くが何か奉仕の姿勢をしてゐるものゝみであることから、これを原始的服飾の形を遺存してゐる一種の祭服であらうと思ふ。即ち原始的服飾そのものではなく



は、單に埴輪に施された裝飾で、衣服や顔面の飾りを模したものではあるまい。帶下に下げてゐるのは刀子で、二口重なつてゐるのは、二合刀子をあらはしたのも思はれる。

### 三 結髪して美豆良する土偶

茨城縣筑波郡小野川村大字下横場發掘

頭上のは雅兒輪髻式の結髪をし、鬢かつらを巻き、美豆良みづらを垂れ、頸玉をかけてゐる。

胸邊の裝飾を乳房の表現と見て之を女とするものもあるが、美豆良を結んでゐるのを重く見て、男子とする。

### 三 長衣を放り着た女子

〔圖版第九〕

栃木縣河内郡雀宮村大字雀宮宿發掘

盤領あけくびの長衣きぬを、衣きぬを着た上に放り着てゐるのは、この女子像のみである。襟と袖口とに赤色を塗り、堅領たてえりには更に複雑な裝飾を同じ色で施してある。『北史』に、我が國の女子の服を記して

亦衣ふち二裙襦裳ふち、皆有ふち二襖かき襪はき

とあるはこんなものかも知れない。島田式結髪をし、鬢かつらを結び、頬に赤く塗つてゐる。

### 第三室

動物器物及び家の埴輪類を陳列してある。動物の埴輪といへば、馬が著しく數多く、こゝに陳列した他の種類は一あるのみで他に類なしといふ様に極めて稀にのみ發見される。しかし鶏が往々出土するのは、第一室の鶏頭の條で説いたやうな理由があつたのかも知れない。

家は死者のすんだ家といふ様な意味のものであつたらうかこれで上古時代の家屋の大様を知ることが出来る。

随つて『魏志倭人傳』にある男子の服は、この種のをさしたものでない。

### 三 壺を頭にのせて運ぶ女

〔圖版第十〕

埼玉縣兒玉郡丹庄村大字關口發掘  
東京帝國大學人類學教室藏

頭に物をのせて運ぶ風俗は、現在には京の島原女のような特殊な風はあるが、一般には僻地にのみその風を遺存してゐるのみである。

島田式に結髪し、眼の下に朱の彩りを施し、頸に頸玉を連ねてゐる。兩腕は缺失してゐるが乳房の凸起がはつきり見える。

### 三 掛帯をかけた女子

群馬縣群馬郡箕輪町大字上芝發掘

島田式の結髪をし、耳に耳環みしわをかけ、耳玉みしたまを飾り、頸に勾玉まがたまを連ねた頸飾をつり、手首に手玉を二重にまいてゐる。胸にある小圓突起は乳房を示すものであり、右肩から左腋下へかけたのは一種の祭服であらうか。前に結び垂れた帯と共に赤色に塗つた鋸齒文帯の裝飾がある。

## 第一 函

### 完飾

### 馬

群馬縣佐波郡赤堀村大字下觸發堀

鬣<sup>たてがみ</sup>の修飾<sup>しゆし</sup>が著しい。背に鞍<sup>くら</sup>をあき、鞍<sup>くら</sup>の下から障泥<sup>あふり</sup>を垂れ、輪鐙<sup>わあぶみ</sup>を懸けてゐる。口の兩側にある轡<sup>くつは</sup>の鏡板は簡單に輪狀をなし、S字形に簡單化して表された轡<sup>ひつて</sup>の引手からつく手綱<sup>たづな</sup>は鞍上にのびてゐる。面繫<sup>おもがひ</sup>は多少剝脱してゐるが、胸繫<sup>むねがひ</sup>及び尻繫<sup>しりがひ</sup>には杏葉が垂れてゐる。尾は完存してゐるが、その短くして末端が水平より高く揚つてゐるのは埴輪馬に常に見るところで、その結束したのを示してゐるであらう。

### 四 面繫だけの馬

埼玉縣比企郡大谷村字花ノ木發堀、根岸伴七氏出品

埴輪馬には面繫・胸繫・尻繫の三繫<sup>さんかすひ</sup>や鞍・鐙、さては杏葉・馬鐸などを以て修飾し、かつ鬣をも飾るところの飭馬<sup>かざりうま</sup>を普通とし、これの様に、單に轡<sup>くつは</sup>と面繫<sup>おもがひ</sup>だけのものは寧ろ珍とすべきだ。

### 四 牛

奈良縣磯城郡田原本町宇東羽子田發堀、田原本町出品





## 聖水

鳥

大阪府南河内郡古市村應神天皇陵發掘

陵を繞る環涅のふちにでも樹てられたであらうか。普通の埴輪と其の燒製を異にし須惠器に似てゐる。

## 哭鶏 二羽

茨城縣那珂郡平磯町磯前發掘、星一雄氏藏

雌雄一番と見ることは出來まいか。

## 哭、吾 甲

〔圖版第十二〕

宮城縣名取郡下増田村大字杉ヶ袋發掘、遠藥源七氏藏

甲<sup>よろひ</sup>のみを模した埴輪も稀に發見されるが、こゝに陳列した二個は、完全した形を見得る事で著しい。此の杉ヶ袋の古墳は、現在埴輪の分布から見れば北端にあたるが、この外に埴輪家三軒をも出土して著しい。流石に製作技術からいへば拙いが、甲の完全な形を見られるところから逸してならない。前者「四九」は短甲<sup>たんかう</sup>を模したものであらうが、後者「五〇」は前者の如く綿<sup>わた</sup>嚙<sup>かみ</sup>を施すべき間隙もなく、袖の無い短衣の如き形をしてゐるが、裏に革か布をつけた革甲・綿甲の系統のものであらうか。中程に鐔<sup>つば</sup>があるが恐らく其の下の部分<sup>こしよろひ</sup>は、腰鎧<sup>こしよろひ</sup>ともいふべく、後世いふ草摺<sup>くさずり</sup>の用をなしたものを表し

頭部の二孔は耳と角との缺失せる痕である。胴にある二孔は、燒製に際し破裂を防ぐ爲めのものである。埴輪馬の發見例は相當數多くあるが、牛に至つては、これあるのみ。

### 四猪

千葉縣東葛飾郡我孫子町發掘

四脚を缺失してゐるが、口吻の形はよく野猪の趣をとらへてゐる。脊の尻に近い部分に逆刺かへりのある矢一筋のあるのは、野駝の武士に射當てられたのを表したであらうか。

### 四犬

〔圖版第十一〕 群馬縣佐波郡剛志村大字下武士發掘

犬の埴輪は極めて珍しい。

### 四犬

茨城縣筑波郡小野川村大字下横場發掘

馬とも思はれるが、犬と見る方が穩當であらう。

### 四猿

茨城縣行方郡立花村大字沖洲發掘、中澤澄男氏出品

高さ二七糎（現存部にて）、小品ながら、猿の特徴をよくそなへてゐる。

### 四鳥

埼玉縣兒玉郡青柳村發掘

見るべきもの。

## 厩椅

子

〔圖版第十四〕

群馬縣佐波郡剛志村大字下武士發掘

後世いふ御椅子ごいしと形の似たものである。腰部以下を殘存してゐるに過ぎないが、大刀を佩いた男子が其上に胡坐あぐらをしてゐたのは、最も珍とするに足る。

## 壘、兵寄棟造の舍屋

茨城縣多賀郡松原村大字高萩發掘、東京帝國大學人類學教室藏

平面が長方形で、上に向つて其の大きさを遞減して屋根の軒に接してゐる。此の母屋に當る部分が寫實に近いものとすれば、四柱を立て、葭茅の類を以て壁代かべしろとし、その外を五筋の押縁を横にあって、繩にからみつけたのを示したのであらう。

屋根は勾配の急な寄棟造よせむねづくりであり、棟の構造には注意すべきものがある。即ち棟の前後に泥障板あふりいた様のものを取付け、其の兩端は奇形の妻隠板に柄挿しになつてゐる。此の妻隠板の上に二本の短い棒の突き出てゐるのは、恐らく千木ちぎを模したものであらう。次に泥障板の上には太く短い堅魚木を四本並べ、堅魚木の中間にあたるところに樋貫をあらはしてゐるのも面白い。かくして此の屋根は、伊勢大神宮の唯一神明造と相似

たのであらうか。

## 五 楯

奈良縣某陵發掘

楯が土偶に附着して表されたものに熊本縣野津發掘武裝男子像〔陳列番號第二四號〕などがあるが、單獨にこれのみを模したものも亦稀にある。こゝに陳列した奈良縣某陵發掘のものは其の中での尤たるものだ。（これは模造品）

## 第二 函

### 五 鞆

群馬縣縣新田郡強戸村大字西長岡發掘

鞆ゆきとは矢を盛る器である。鏃を上部にして挿したる狀を模してゐる。頸部には玉を装ひ、紐を前に交叉してある。

### 五 鞆

〔圖版第十三〕

群馬縣佐波郡殖蓮村大字八寸發掘

鞆ともしは上代の弓を執るものゝ常に左腕に著けてゐたが、中世以來その制が全く廢れ、伊勢神宮御神寶中に僅にその退化の様式のことを拜し得るのみである。これは裝飾の



屋根は切妻であらうが、他の家と異なり、棟の轉ころびが殆んどないのは、地方的特色であらうか。葺下しの中段に鐙を繞してゐるが、それと妻縁とに陰刻の點のあるのは押縁を以てそこを押へ、これを繩かゞりにしたのを示すのであらうし、平ひらにも妻つまにも格子形に篋彫線のあるは、葺草の上を押へ竹でからみつけたのであらうか。妻の棟下に圓い孔があるが、煙出孔を表したとも想はれる。棟上に堅魚木がのせられてゐる。

### ㊦ 板格子ておさへた屋根

群馬縣多野郡美土里村大字白石發掘、東京帝國大學人類學教室藏

切妻の屋根には破風板をつけ、大棟の兩旁に横材を上下に二支取付け、これに堅材四本を格子形に取付け、其の交叉したところに貫を前後に締め固めてゐる。堅材の上部は何れも棟の上に著しく突き出てゐたであらう。今日の民家にも、これに似た構造の屋根を見ることが出来るが、孰れも草葺屋根の棟を保護する爲めと思ふ。

### ㊦ 切妻の屋根

埼玉縣大里郡畠山村發掘

著しく轉ころびを持つ切妻の屋根だけのもので、これで完全のものとすれば、建築家のいふ天地根元宮造といふのに近い。屋根の勾配の著しく急であるのもその爲めであり

た棟の形をしてゐるのを注意せう。

## 五 大丸棟の家

〔圖版第十五〕

奈良縣磯城郡城島村大字外山發掘

平面は長方形をなし、兩妻に入口の如き者を開き、左右に各二個の窓を設けてゐる。屋根は下の方に緩い勾配のある寄棟造となり、其の上に大きな丸棟まるむねをのせてゐるので一寸入母屋造いりもやづくりに似た形となつてゐる。これは先づ下部の寄棟造の木屋を組み、其の上に竹を彎曲して筒形に切妻造の木屋を造り、其の上を藁又は茅の様なもので葺いたのであらう。下の屋根の流れに弛みたる（即ち反り）があり、又軒付にも多少の反りが見える。

## 六 二階建の家

兵庫縣飾磨郡水上村大字白國字人見塚發掘、和田千吉氏藏

二階建の家は珍しい。平面方形に近く、一階・二階共に各面に大きな窓を二つづゝ開いてゐるのは、明障子でもはめたであらうか。一階の屋根は狭い葺き下しとなつて居り、二階のは中央に空所を残して其の四面を割合に緩い勾配の屋根で葺いてゐる。屋根の流れに多少の弛みのあるを注意されたい。

## 七 煙出孔のある家

宮城縣名取郡下増田村大字杉ヶ袋發掘

## 第四室

埴輪の中で、圓筒を除いては土偶が最も著しい。土偶は其の起源・意義等にも考究すべき問題が残されてゐるが、しかしこれを服飾史の立場から見るのが、最も趣味あることであらう。土中してゐる遺物だけでは、上古時代の服飾を明かにすることが困難である。とはいへ、一方、埴輪は何故に、またどんな風に樹てられたか、外國に何か關係があるかといふ様な問題にも注意を怠つてはならぬ。此の室は埴輪概説といふ様な意味合で陳列されてゐる。

流れの中央下部が膨れて丸くなつてゐるのは、平面圓形の堅穴などの上に之が建てられてあつたのを示すものであり、屋根の内部に障屏のあるは、簡單な母屋の形ではなからうか。棟は折茅風をあらはし、其の上に十本の針目覆、九州地方でいふダゴをのせてあつたらしむ。

### 三切妻の屋根

群馬縣新田郡九合村發掘

これも天地根元宮造式のもの、棟にそうて樋貫を表し、その下に一種の裝飾文のあるのが明かに見られる。

### 三煙筒を立てた屋根

群馬縣多野郡本郷村發掘

一寸見ると家の屋根といふ感じのうすいもの、殊に軒端に端板を打ち、大きな圓頭の釘を打ち列ねて居るのは屋根らしくない感じを強める。棟上に二ヶ所あけた筒は上端を缺失してゐるので、その性質の推定に苦しむ。

### 杓串を棟上に立てた屋根

〔圖版第十六〕

群馬縣佐波郡三合村波志江發掘、柴田常恵氏藏

これも天地根元宮造式のものであらうか。勾配の著しく急な屋根の棟の上に、半筒をのせ、これに先きを細くした棒、即ち串をいくつも立てゝあるのは面白い。

## 第一 函

本函には、上古時代の服飾の大体を知るに足る所謂典型的の埴輪テイビカルを男・女子像及び馬に求めてこれが復原圖を作り、其の圖及び埴輪と現存遺物の中よりその服飾品にあたるものを撰び、三者を併せ陳列して一般の理解を易くすることゝした。固より上古時代として、單一様の服飾のみではなく、相當數多くの變異バリエテイを有してゐたのであるが、今は複雑をさけ、代表的と思はれるものを各々一例づゝ求めたのである。

### 空衣禪を着けた男子

武藏國比企郡大谷村花ノ木發掘

武裝ならざる男子の服飾の大体を、これによつて見られたい。冠をつけ、美豆良ミヅラを垂れ、頸玉くびだまを巻き、衣禪きんを着け、履あそぐつを穿いてゐる。

上古時代の被物に、鉢卷・鬘・冠帽の三種がある。鉢卷と冠とは同一義のものであるが、前者は布帛や植物の蔓などで頭部を巻いたものであり、冠はこれが發達し、金・金銅又は銀などで立舉たちあがりを美々しく飾つたものであり、帽は袋の様なものを被つたり、鍔のある今の山高帽子に似た形のものであつた。こゝに陳列したものは冠をつけてゐる。冠は支那で、幘さくと呼んだもので、我が舞樂で天冠といひ、皇太子の禮冠に半頭幘とあ





ものであるが、これには缺失して痕のみを残してゐる。頸には頸玉くびだまを懸けてゐる。甲よろひは「短甲たんかう」と稱するもので、鐵板を鋸で矧ぎ合せた極めて原始的の様式のもの、これ亦往々古墳内から鐵製の實物が發見される。ヅボン釣りの如きは、甲を兩肩に釣る爲のもので、後世の「綿嚙わたかみ」と同じものである。左腰部に見えるは大刀たちで、柄部を缺いてゐるが、多くは復原圖に見る様に、頭椎大刀かぶつちのたちを佩いてゐる。

此の土偶は、腰部以下を缺いてゐるが、普通武裝の土偶でも、足結ひをした禪はかまをはき、履あきぐつが靴なぐつをばいてゐる。

武裝には、この短甲冑の外に、挂甲かけよろひが行はれてゐる。

### 壹 五鈴をさげた女子

群馬縣佐波郡赤堀村大字下觸發掘

島田式の結髪をし、額上に櫛を挿し、耳に耳環みくわを懸け、更に耳玉みしだまをも施してゐる。頸には頸玉くびだまをかけ、窄袖つそでの衣きぬを着て帶を締め、その左側に鈴鏡を下げてゐる。

背に白地に黒い斑點の所々に残つてゐるのは、衣きぬの文様を示したのであらう。

上古時代の一般の婦女は、衣きぬを上に着、帶をしめ、腰以下を裳もで纏つむひ、潰つぶし島田しまだに

るものゝ如きはすべてこの系統のものである。

美豆良は「耳連」の約であらうといはれてゐる。男子の結髪の風で、これにこゝに示したものの如く長く垂れた「下げ美豆良」と、耳邊に結んだ「上げ美豆良」との二種がある。頸玉には、丸玉の外に、勾玉・切子玉・管玉などを併せ用ゐたことも相當廣く風をなしてゐたらうが、埴輪に於ては、かゝる風のものを見ることは極めて稀である。

衣服は古史に「衣・褌」とあるもの、衣は窄袖で丈が短く、垂領で赤紐を以てしめ、下に太く寛つたりした褌をはき、衣には帶を結び垂れ、褌は行動に便にすべく、膝のあたりを結んでゐる。これを古史に「足結」といふてゐる。衣・褌は、麻や絹を地質とし、多少色染めもしたが、普通には白を用ゐたであらう。

### 突短甲をつけた男子

〔圖版第十七〕

武藏國北埼玉郡上中條村發掘、根津伴七氏藏

頭部に被つたのは、金屬製の甲を表したものである。この種の鐵製の實物は往々古墳から發見せられるもので、その眞向即ち前方が恰かも軍鑑の衝角の如くに作られ、特に眉庇の拵がないので、衝角付冑と呼んでゐる。背部より左右へかけて鞆のあつた

### 第三 函

埴輪土偶は、男・女さか、全く相似た姿態の男子とかいふ様に、對をなすものなならべるこゝが多かつたらしい。今、こゝに其の二例を陳列する。

#### 充 武装男子一對

栃木縣下都賀郡南犬飼村大字安塚發掘

帽を被り、頸玉をかけ、衣・袴を着け、大刀を佩いてゐる。二個とも、作はよくないが、すべてを等うしてゐる。

#### 古 踊る男女

〔圖版第十九〕

埼玉縣大里郡小原村大字野原發掘

その作雅拙にして怪奇の風があり、普通の埴輪と趣を異にするものがあるが、歌舞に興ずる男女の姿態を具へてゐる。

### 第四 函

一古墳から出土するすべての埴輪をあつめて其の種類・表現等を見ることは、埴輪の研究上極めて必要の事であるが、これは既掘のあさのない處女墳について、學者の綿密な發掘調査の行はれたものでなければ、其の

似た結髪をしてゐたらしい。衣は男子のと同様に、丈の短い窄袖で、垂領になり、胸の邊りを紐でしめ、帯を結び垂れてゐる。下には裳を纏うてゐたが、裳が直ちに脚に觸れてゐたかどうかは、之を直ちに決することが出来ない。恐らく裳の下に男子と同様に袴をつけたこともあつたらう。

櫛は今日のものと趣を異にし、堅櫛のものが一般に用ゐられてゐる。

## 穴飾

### 馬

〔圖版第十八〕

埼玉縣北埼玉郡上中條村發掘

古墳からは種々の馬具を發見するが、これがどんな風に著装されたかを見るは、この埴輪馬に如くはない。殊にこの馬は、其の馬具を皆具してゐるのを以て知られてゐる。即ち脊に鞍橋を置き、障泥の上に輪鐙を垂れ、鬘を飾り、首に面繫、胸に胸繫、尻に尻繫を著け、口には轡を施してゐる。口の兩側に見えるは轡の鏡板で、周邊に六鈴をつけてゐる。それより咽喉部に向ひ、末端に環狀をなせるは轡の引手で、それより鞍の前輪に達するのは手綱である。胸繫に懸垂してゐるのは馬鐸で、尻繫の辻から三方に下げたのは杏葉である。これにも鈴がついてゐる、この様子を鈴杏葉といふ。

圖

版



完璧を期する事が出来ない。併し從來の例にはこれにあたるものがないので、今、暫く次善につき、比較的多くを集めたと思はれるものゝ中、埼玉縣大里郡大寄村大字上敷免發掘のものここに陳列した。

**七 埼玉縣大里郡大寄村大字上敷免發掘埴輪**

土偶及馬

男子と女子とを各三軀と馬一頭とを數へることが出来る。



圖版第一 堅魚木を上に合屋





屋舎たせのを代制 二第版圖





机 三 第 版 圖







子男たれば結を帯





子男つ打を鼓太 五第版圖





子男たけつを甲桂 六第版圖







子男るゐてけかを手に柄の刀大 七 第 版 圖





子男るぶかを胃の形頭 八 第 版 圖





子女る着り放を衣長 九第版圖







子女ぶ運てせのに頭を壺 十 第 版 圖





た 一十第版圖

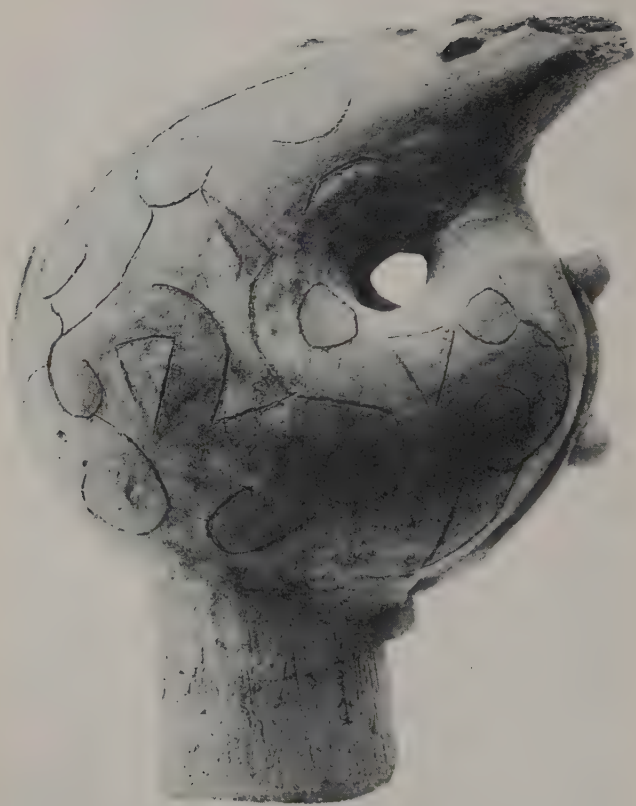




甲

二十第版圖





柄

三十第版圖

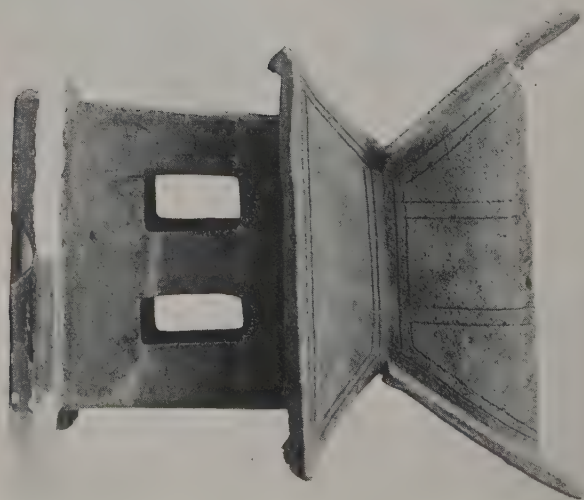
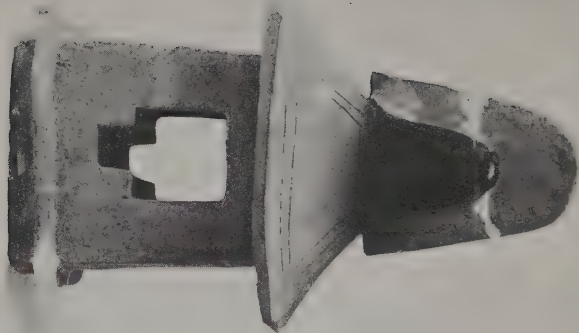






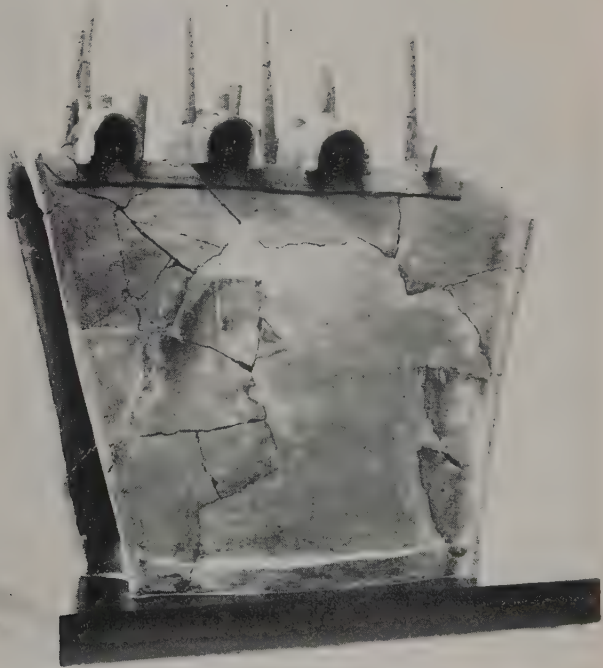
子 椅 四十第版圖





家の棟丸大 五十第版圖





根屋たて立に上棟を串







子男たけつを甲短 七十第版圖





馬たし具皆を具馬 八十第版圖





女男ろ踊



GTU LIBRARY



3 2400 00559 7947

昭和五年十月十一日印刷  
昭和五年十月十六日發行

〔定價金廿五錢〕

帝 室 博 物 館

東京市芝區今入町二六

印刷者 鈴木 安 二

東京市芝區今入町二六

印刷所 鈴木 印刷所





